

至福の時間



川涯 利雄

雨の降らない日は、老人ホームまでの片道一時間の道を歩いて往復する。

三日前、アキレス腱を痛めて病院に行ったら運動のしすぎだといわれた。今はドクターストップである。アキレス腱はいまだに痛い。今は車で一〇分程度。まことにあつけない。

一時間歩くと、多くの花々・草の実に出会う。野薊の澄みとおる紅紫の花のうつくしさ。緑の葉かげに二つ三つばかり実を結ぶ赤い野イチゴも可憐である。紫のカキツバタに出会うと、人間の品位ということなども考える。

今、合歡の花が咲き出した。宮柵二の憧れた

花である。植物はそれぞれの花の形を持ち、相応の実を持つ。みごとな造形である。

夕方六時過ぎに勤務を終えると、道を海辺にとつて、東シナ海に沈む夕陽を眺めながら歩いて帰る。夕陽の沈む位置が少しずつ北へ動くこともはっきりわかる。河口をさかのぼる満ち潮のすさまじい力。その中を川上にごぼる魚群を感嘆の声を抑えて見守る。豊かな夕潮を分けて港に帰ってくる白い船をときめきながら待つ時間もすばらしい。

上空には、悠然と旋回する鳶の群れ。いそがしく猥雑な感じで中空に騒ぐ鴉たち。振り向きもせず、低く港を横切る孤独な大きなヘラ鷗。

私はこうした自然の変化、その中に生きる生き物たちに、言い知れぬ親しみを感じながら毎日歩いた。友人達と触れ合う時間を失っ

たこの三日間はいかにも惜しい。

（車を海辺に止めて、ゆっくり眺めたらそれでいいのだが、車を使うこの数日は別の用件を妻に命じられて時間の自由がない。）

自然の変化に触れながら歩く往復二時間は至宝というべき時間だった。

私どもの生活には美しい四季がある。十二ヶ月の暦がある。その中に一月一日、三月三日、五月五日、七月七日、九月九日と節目節目に行事を置いて、人々は生活にメリハリをつけて生きてきた。自然の変化にしたがって農業を営む人々には二十四節季の暦が欠かせなかったことだろう。種まき、施肥、草取り、収穫などは自然の移ろいに添った、静かで智慧に満ちた文化そのものだった。

七十二候という暦もある。毎日歩いていると、七十二候を作った先人たちの感性に驚嘆

する。五日置きに自然ははつきりした変化を示していることに気付いたのである。

毎朝、ほぼ同じ時間にほぼ同じ道を歩くと、日々咲き変わる花々に出会う。おや、数日前に発見した花がもう花を落としている。その傍らにまた新しい花が咲き出している。こういう観察をとおして七十二候の暦は出来たのだろう。

いそがしく奔走してはならない。みごとに自然の変化を楽しみながら、じっくり生きることが大切である。命がたっぷり厚く大きくなった気がする。感性が甦った気がする。アキレス腱の痛みが引いたら、また朝夕一時間の至福のときを楽しみたい。

（歌人、華短歌会前代表）